

文学博士湯澤幸吉郎君の「近代國語の研究」に対する

授賞審査要旨

本研究は湯澤幸吉郎君の左の三著書を合せての業績を指すものである。

- 一、室町時代の言語研究(昭和四年十二月刊行、同三十年八月再版)
- 二、徳川時代言語の研究(昭和十一年九月刊行、同三十年十月再版)
- 三、江戸言語の研究(昭和二十九年四月刊行)

この三書は共に各時代の口語資料を対象として、その文法の史的考察を行つたものである。すなわち一は中世の中期より末期にかけて存する京都中心の口語文献たる抄物の研究であり、二は江戸時代前期の京阪中心の口語文学たる歌舞伎・浄瑠璃等を調査したもの、更に三は江戸時代後期の江戸中心の口語文学たる小説・歌舞伎・脚本・落語等を資料として、その用語を観察したものであつて、まさしく中世・近世を通じての口語文法の史的研究であるといふことが出来る。

由来我が國語の研究は、前代よりの因襲にもよるが、主として古代語に偏して、中世以降の言語の研究に至つては未だ甚だ開拓されない情態にあつた。言い換えると、現代口語に近接する言語ほどその研究が疎かにされていたのである。殊に室町時代は我が國語の中古語より近代語に移する過渡期として國語史上重要時期を劃するにも係らず、

その言語の実相が甚だ明らかにされなかつた。更に江戸時代は国語が近代語の形態を取り尽した時であり、殊に現代口語の前身として、また重要な時期であることはいうまでもなく、已に若干各種の研究がないのではないが、未だ体系的に史的觀察を試みたものはなかつた。これを文法史の著述の上より見る時、已に奈良朝・平安朝および鎌倉期のものの現れているのに対して、室町期・江戸期のものは一つも存しなかつたのである。

然るに著者は早く中世語の研究を必要として、これが基礎研究を思い立ち、爾来十余年の努力によつて「室町時代の言語研究」が成つた。実に国語学界の先駆的著述であつた。著者は更に進んでこれに次ぐ江戸時代口語の研究に着手し、数年にしてその前篇たる「徳川時代言語の研究」が成り、又十数年にして後篇たる「江戸言葉の研究」を大成した。これはまさしく我が古代語の一転期より初めて、近代国語の成立を史的に觀察し、以て現代口語への直接の由来を究めたものと言ひ得る。この三書は次を逐うて觀察の精緻に進んだことを感ずるが、元來その意図の連続的事業であつたことはもとより、従つて研究の方法及び著述の編成・要目等に至つては、大要同一様式のものであつて、まさに一体系の三部作と見て妨げないものである。

今この三書に通じた著者の研究態度を見るに、著者は先ず資料の選択に於て細心の注意を払い、力めて作者（随つて地方）及び年代の明らかなものを選び、殊に力めて口語に近いと認められるものを取ることに慎重であつた。只木版本、古写本等の原拠に近いものに及ばなかつたのは惜しいことであり、かつ時代言語を標榜したものとしては、資料の偏倚した嫌がないではない。その觀察点に關しては、文法を中心としたことは勿論であつて、その体系は一般普通の国文法における範疇に従つたものであるが、就中變化の著しく従つて時代の特異性を示す語の形式部に重きを置い

た(動詞・形容詞・助動詞・助詞に力を注いだ)ことは、文法的觀察から来る自然のことである。

まず音韻のことより入り、仮名の自由表記の情態より考察してその實際音価を推定し、かつ音の分離混淆より変訛音のことに至るまで周到に觀察してある。さて品詞の別に及んでゐるが、常に品詞の文章上における職能を合せ考へることを忘れざるのみならず、語の成立および変化過程を考へ、殊に語の用途別を考察して、用法の分化情態を可なり精細に捉へている。更によく前代語および現代口語に比較して、その遷移過程に注意し、また時には地方的比較をもなして、その史的觀察を怠らなかつた。殊に活用語については、口語の変訛的活用の精密な觀察はもとより、語法的一般原則にはずれる特殊活用法をも決して見逃さなかつた。すべて採取された語彙は漏さずこれを使用するのであつて、各品詞に多数の単語が配列され、とりわけ助動詞・助詞等の形式語に至つては、時代的の単語を網羅し、而も五十音順に提示して一面辭書的の用をなしている。凡そ語例・文例の豊富なことは、未だ曾て他の文法書に見ない一特色であつて、これ又本研究の精緻綿密なる現れである。要するによくこの種の研究の要諦を捉へて、極めて穩健かつ堅実な記述的・実証的研究の綜合であると言ひ得る。

かくして始めてこの三書がわが國語学界に施ける研究の空隙を填めてくれたのであつて、已に存する奈良朝・平安朝・鎌倉期等のそれらに伍して室町期・江戸期の文法史が成つたわけである。勿論これらの書になお補訂すべき点の存することは、著者自身も言つてゐる如くであるが、まず以て基本的の礎石を置いた研究であつて、蓋し近時の國語学界における一權威として推すに憚らない。而して前後三十余年に亘り、独力を以て莫大数の原拠を読破した根氣と、語彙・文例の摘集・整理を遂げた勞力との如何に非凡であるかは、真に稱讚に値いするものである。